

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

ジョージ・H・カーの琉球史学

著者	山口 栄鉄
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	沖縄文化研究
巻	40
ページ	1-29
発行年	2014-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/9230

ジョージ・H・カーの琉球史学

山口 栄 鉄

はじめに

ジョージ・H・カー（一九一〇～九二）につき在冲古文書学の権威アンソニー・ジェンキンス教授が「沖縄の歴史に関する英語圏の著作者としての第一人者であり、今日でもその地位は不動である」と述べたのは二〇〇一年のことだった。¹⁾その後十年を経る二〇一一年三月にジェンキンス教授の尽力によって「沖縄公文書館所蔵 ジョージ・H・カー文書目録」が発刊され、日本、沖縄、台湾、ハワイ関係カー文書のほぼ全容が明らかになりつつある。その後さらに二年を経る本稿執筆二〇一三年の現時点においても、ジェンキンス教授が「不動」としたカー評価には変わりなく、特に国際琉球学・欧文琉球学の分野で研究にいそしむ学究の間では、カーがその代表的著作 *Okinawa ~ The History of*

1 ジョージ・H・カーの琉球史学

an Island People (一九五八、新装版二〇〇〇、以下、「カー原著」)の巻末に付した琉球関係欧文献録なしに研究の深化は望めないとの評価が定着し、その文献録を基点にますます研究の深化が図られている。⁽²⁾ そのことを示す最も顕著な例の一つがフランスにおける琉球研究の第一人者 Patrick Bellevaire 氏の編になる琉球関係欧文原典史料集成 *Ryukyū Studies: Western Encounter, Part I, II, 全十巻* (二〇〇〇—二〇二二)である。この労作によって、わずか十数年前まで、琉球関係の欧文文献の探索に際し、一々欧米諸国の図書館、古文書館収蔵圖書の調査検索の労を余儀なくされていた欧文琉球学徒の労力が劇的に軽減されることとなった。なお、「欧文日本・琉球学」のその後の動き、現況中間報告としては筆者の『大琉球国と海外諸国』(二〇〇八)、『英人日本学者チェンバレンの研究』『欧文日本学』より観た再評価』(二〇一〇)などを参照いただきたい。

ジェンキンス氏が「カー原著は一九八七年第十二版で一万三千部の売上げを記録している」と記している貴重な英文書ではありながら、いまだ完全和訳版がなく、残念ながら一般の読者には十分その真価が伝えられているとは言いがたい。

本稿の筆者は原著の出版元、米国チャールズ・タトル社より和文翻訳権を得て、ここしばらく訳業に取り組んできたが、その作業がほぼ完成に近い今、改めて中間報告の形で欧文琉球学史上におけるカー史学の特質につき触れておきたい。そのことは、必然的に従来の沖縄地元の研究を含む、わが国の南島史学の専門家による学術成果には見られなかった国際琉球学・欧文琉球学史上の意義、評価に

及ぶこととなろう。それはとりもなおさず、戦後著しい発展を遂げつつあるわが琉球史学の分野ではありながら、ともすれば看過されがちであった欧文文献を主眼とする新たな琉球史学の一面を表舞台に押し出し、欧文琉球学、琉球史学の発展に寄与せんとした試みでもある。いずれカー原著の和訳版が一般読者の目にも触れ得る段階に至れば、外国入学者がいかに深い研究成果を挙げ得るかという最上の例を読者の前に提示し得ることだろう。その上、西洋における琉球研究の歴史には欧米入学者による実に多くの研究成果の蓄積のあることが明らかとなろう。

カー原著の内容概観

全五四二頁からなる浩瀚な原著の目次を概観するに、全IV部、十一章、七十六節からなり、神代の時代から沖縄戦の終焉に至るまでの壮大な展望を試みる労作であることが一目瞭然である。ここでは本邦初訳になる和訳の形で、小節以外の全IV部十一章を掲げ、異色の英文琉球史書の片鱗を示すとしてよう。

第I部 中山（東海）の独立王国

一章 神代時代（一三二四年まで）

二章 葛藤の一世紀 一三二四～一三九八

三章 中山国最良の日々 一三九八～一五七三

第Ⅱ部 孤立～「遠海の孤島」

四章 大陸の戦争と独立の喪失 一五七三～一六〇九

五章 孤立化の時代 一六〇九～一七九七

第Ⅲ部 二つの世界の狭間はざまにあつて

六章 防波堤としての琉球弧 一七九七～一八五三

七章 「秃鷹」と「はつかネズミ」…沖縄におけるペリー 一八五三～一八五四

八章 日本国、沖縄人を「保護」 一八五五～一八七八

第Ⅳ部 辺境の地～沖縄県

九章 琉球王国の終焉 一八七九～一八九〇

十章 日本国の同化策 一八九〇～一九四〇

十一章 金槌かなづちと金床かなどしに挟まれて～沖縄と第二次世界大戦 一九四一～一九四五

カー原著には白黒写真版三六葉、著者カー自身の手になる挿絵二三個が収められ、内容を一層豊かなものになっている。しかし、二〇〇〇年発行の改訂増補版では、残念ながら写真版三六葉全てが省か

れている。

カー欧文書誌の意義

原著巻末には実に六七ページに及ぶ琉球関係欧文書誌、注記、索引が収められている。欧文書誌の部はカー史学の真骨頂ともすべき部分で、その欧文琉球学史上における意義は計り知れない。まず、カーは私があえて「欧文琉球学の父」と呼ぶことにしているバジル・ホール・チェンバレンの「琉球書誌」(一八九六、これは英人チェンバレンが、レオン・パジェス、ヘンリ・コルデア、フォン・ヴェンクスターン以来の琉球関係欧文書誌を通覧し、特に近世日本国の専門家による琉球関係書目を無視すべきではない、として、チェンバレン自身の探索検証し得た和文文献全五三点を挙げるもの。詳細については本稿筆者の「王堂チェンバレンとその琉球研究の記録」、一九七六、参照)をはじめ、チャールズ・レブンウオースの「琉球島」(一九〇五)、独人エドマンド・シーモンの琉球書誌(一九二四)、ロルフ・ビンケンシュタインの沖縄書誌(一九四〇、一九五四)など、欧人琉球研究者の書誌録を概観している。戦中、戦後にかけてのエール大学教授ジョージ・マードック率いる沖縄関係資料文献録(これは今日、エール大学人類学研究所にその影を留める)、J. W. モランが一九四六年に修士論文としてハワイ大学に提出した琉球書誌論、そして一九五三―五四年度にかけ

て、カリフォルニア大学歴史学科でカー教授の率いる琉球研究セミナーのメンバーによって仕上げられた *Reference List of Books and Articles in English, French and German* などが挙げられている。その頃カーが打ち込んでいた琉球研究には比嘉春潮や久手堅憲次らの助力のあったことが窺われる。⁽⁵⁾

カー琉球史学の淵源

戦後数年を経る一九五一年、米国政府の統治下にある極東地域復興、特に学術振興を目指す一大プロジェクトが発足する。米国陸軍省の支援のもとに Pacific Science Board of the National Research Council が組織化され、SRI シリーズとして知られる一連の琉球研究モノグラフが出版される。翌一九五二年に、時の沖縄列島米国民政府民政部長ジェイムス・ルイス准将から Pacific Science Board に対し、科学研究を主目的とする研究成果のほかに、琉球史の概要をまとめた補助教材の編纂に当たるべしとの一大司令が下される。カー氏は原著巻頭にて「：琉球列島の施政にあたって、当時ルイス准将は、連日のように直面する諸問題の理解と解決にはおそらくそのような教材が欠かせない、と信ずるに至っていた」と述べている。そして Pacific Science Board の主要メンバーであったハロルド・クーリッジ及びジョージ・マードック両博士の勧めにより、そのような作業に当たるべしとするルイス准将の司令がジョージ・カー氏のもとに届くのだった。

わずか一年後の一九五三年、カー氏はPacific Science Boardの元に全二四〇枚よりなるタイプ稿本 *Ryukyu: Kingdom and Province before 1945* を提出、それはその後まもなくして本プロジェクトの立役者ルイス准将の元に届けられる。准将の死の直前のことだった。三年後の一九五六年に、米国民政府よりその和訳版が出版される。これが、すなわち今日識者の間で「赤表紙本」として知られる「琉球の歴史」である。原著者カー氏の手を離れたタイプ草稿版が、当時那覇在のDirector of Civil Information and Educationの監督下に琉球大学関係者、民政府職員数名を動員する和訳プロジェクトとして進められ、その結果として出来上がったのが、その赤表紙本である。和訳担当メンバーが比嘉春潮氏より教示、アドバイスに与ったことが巻末の「訳者あとがき」によって知られる。後年、そのタイプ稿を大きく改訂増補し、全く新しい形で米国のチャールズ・タトル社より出版されるのが、すなわち、今ここで扱う原著 *Okinawa - the History of an Island People* である。このタトル社版でカー氏は「赤表紙本」の訳述作業の経緯につき「Pacific Science Board当局や私の世話になった日本本土、沖縄の学者、知人（そして私自身）への相談なしに進められた」と記している。⁴⁾

国際琉球学・欧文琉球学への礎石

「琉球学が真に飛躍的な進展をみせるためには、和・漢・洋に通じる知識の集積をもって始めて

可能であると言えましょう」――早い頃の著作「異国と琉球」の巻末で、私はそのような感慨を吐露したことがある。特に「洋に通じる琉球研究分野」の開拓発展に一大展望をもたしめてくれたのがカー原著だった。そのような新分野、私の提唱するいわゆる欧文琉球学にメスを加える原著者カーの面目躍如たる部分のいくつかに目を向けてみよう。ここでは、とりあえず第一尚氏発祥前後の古代琉球における精神史の片鱗、先島の伝承説話、中華の国、明朝廷の頃にまで遡る中琉冊封関係の淵源、そしてペリー来琉と一米人琉球研究家との関わり、蔡温考、ベッテルハイム観：などにみるカーの手法、論議に目を向けてみよう。

まず、カーの「ノロ文化」、「ノロ制度」という琉球の精神史の理解に欠かすことのできない分野への目配りを忘れることができない。カーのノロ制度の理解に役立ったのは、Robert Steward Spencerの手になる論文一篇“The Noro, or Priestesses of Loo Choo”⁽⁵⁾だった。この論文発表の舞台となっているのは、明治期以来欧米人の日本研究者に研究発表の場を提供し続けている日本アジア協会の学術専門誌 *Transactions of the Asiatic Society of Japan* である。昭和初期の発表になるこの論文の著者スペンサーは伊波普猷、真境名安興、島袋源一郎らによって始められ、その後まもなくして廃刊の憂き目をみたと言われる「南島研究」誌の息吹に触れ、あるいはまた特に直接指導を受けた島袋源一郎より勧められるままに袋中上人の「琉球神道記」や羽地朝秀の「中山正鑑」、あるいは「球陽」をひもといては、それらの書の説く琉球開闢説に目を通したりしている。その頃「おもろ双子」(スパン

サーの表記のまま」と取り組んでいた伊波より聞き及んだのであろうか、「聞得大君」と尚真王以来の新たな「ノロ」制度、その伝統を調べ、真境名安興の「沖繩一千年史」に引用される「中山世譜」に当たっては、その背景を究めんとする意欲を示したりしている。こうして昭和初期の欧人琉球研究家の知識がそのままカーによって吸収咀嚼され、その知識はまたカー原著の和訳版の形で今日の琉球文化圏の読者諸氏に伝えられんとしている。

和漢の文献を中心とする従来の琉球史学に新たな息吹をもたらすのが、カー史学によって開拓解明されつつある東アジア圏、特に旧王国時代の琉球国と欧米諸国との関係、交流史の分野である。この領域におけるカー原著の貢献、意義、その重要性は筆舌に尽くし難い。そのことを最も鮮明な形で反映しているのが、すでに触れたカー原著巻末にみる全く他の追隨を許さない欧文文献書誌であり、また本書の第Ⅲ部六章である。

戦前まで沖繩に残っていたという一四二五年という年号の刻まれる古文書によって古代史上の傑出した人物、かの第一尚氏の基を開いた尚巴志の人物像に迫り、貿易船を以って万国の津梁としつつ琉球国を統一し、至宝に満ちる王国の富を築いていた時代をカーは、その頃ヨーロッパ各地に勃興しつつあった「都市国家」に比し、「中山」が、かのイタリアはジェノヴァの富、ヴェニス的美、そしてポルトガルリスボンの力にまでは及ばなかったものの、経済成長のパターンは基本的には、ほぼ同様の経過を辿っていた、としている。今少しカーの声に耳を傾けてみよう。「：沖繩において半世紀

近くも存在感を示した尚巴志が、かのポルトガルの航海王ヘンリー王子と同時代の人物だったことは興味深い。兩人とも自国の貧しさと国土の狭隘さを克服すべく海外に進出、商業活動の改善と伸張とに献身したのだった。ヘンリー王子は文芸復興期の科学の発展に活路を見出す一方、ポルトガル人自身はまた、宣教活動への情熱に燃えていた。闘争好きなポルトガル人は、キリストの名のもとに極悪非道をもあえて正当化せんとした勢いがあった。尚巴志の背景にはルネッサンスにおけるような知的な力といったものはなかったとはいえ、明朝廷の、かの永続性に欠けてはいた海外進出の機運に刺激されたことではあろう。沖繩人には、しかし、己れの信念を広げるのに城や町を焼き、剣を振りかざすといった狂信者はいなかった。彼らは口論を好まなかった。兵力動員や武器の準備調達にかける力などなく、戦の余裕いぐさなどなかった。このような弱者としての立場から、彼らが好むと好まざるとにかかわらず学んでいったのが、優和順応の精神だった」(第三章、一)。以上のような陳述は、かつてどのような史家の著述の中においても聞かれなかった。国際的視野、知見を備えた人物にして始めてなし得ることである。そのような数あるカーの言葉に接するたびにわたしは、国際琉球学がようやくにして「国際」の名に恥じないレベルにまで達した、との感を深くしたものである。優和順応の精神、広く知られる「ユイマール精神」、「善隣国交」にかける島人の生き方、その精神の機微をカーがよく理解し、西洋勢、大和の「力・武」に対するに「和」の精神を以って対していた沖繩の人たちの心意気を温かい眼差しで描ききっていることを読者は文中のここかしこに見出すことだろう。⁽⁶⁾

進貢・接貢・冊封

この分野でもまた、国際交流史上における琉球国の存在、その理解に欠かせない文献、知的財産の多くが一九世紀から二〇世紀の中葉に至るまでの欧米には残されている。カーがそれらを縦横に駆使し、吸収咀嚼し、本書に採りいれていることは、丹念に読み解く読者には明らかなことである。

十四世紀末は朱元璋のころ、すなわち明の太祖洪武帝の治世のころに淵源を有し、以後五〇〇年もの間、中華の帝国との間に友好の絆を築いてきた王国史の背景、その究明にカーの典拠とするのが J. F. Fairbank and S. Y. Teng: "On the Ch'ing Tributary System" (1941) である。当時のハーバード大学における中国史の權威、フェアバンク及びデン両教授の手になる実に一一〇頁を超える労作で、同大エンチング中国研究所の紀要「ハーバード・アジア研究」誌に発表されたものである。明・清両王朝にはあくまでも「夷国」に過ぎなかった琉球王国との関係につき、カーは「琉球がはじめて名目上の進貢関係を結んだのが一三七二年、次の年には朝鮮、安南、チャンパが記録されている。これらの国々のうち、その後幾世紀にもわたり、引き続き友好関係を維持したのは、琉球と朝鮮だけである」と述べている（第二章、二）。因みに、私の手元にある同ハーバード論文中、清朝初期は聖祖皇帝の康熙元年以降二世紀間、すなわち一六六二年より一八六〇年（文宗）までの進貢回数を見るに、最も朝貢回数が多い朝鮮に次ぐ琉球国が一五回、この数字は琉球に続く安南、シャム、ビル

マ、ラオス等に比し、格段に多い回数を反映するものとなっている。

冊封琉球使関係史料の存在にも早くから幾人かの欧人学者が注目していた。まずペリー提督の席通訳官として来琉したサムエル・W・ウィリアムズの著作が想起されよう。カー原著巻末の欧文書誌中、ウィリアムズの項には冊封関係を含む中琉関係の論文五件が挙げられている。ペリーと共に琉球国の土を踏む以前、一六年も遡る頃モリソン号搭乗の一員として琉球を訪れているウィリアムズは、その時の経験をペリー随行録、モリソン号航海記の形で記録に留めている。

ウィリアムズが特に注目するのが冊封使録三件である。そのうちカーがまず徐葆光の「中山伝信録」(一七二二)に目を向けるのは、当然のことながら、この書が一八世紀中葉において、早くも西欧に琉球国の政治社会習俗の様相を伝える契機となっているからである。中国駐留の仏人宣教師ゴビールの手になる伝信録の仏語による要約版が西洋に伝えられるのは一七五二年のことだった。その後、一九世紀を迎え、かのキャプテン・バジル・ホールや、ホールの同僚マクロード医師をはじめ、華々しく展開する異国船来航期に琉球の地を踏み、航海録を発表する欧人識者の必ず参照する文献の一つとなっていた。カーは、その他、ウィリアムズの取り上げる冊封使李鼎元の「使琉球記」(一八〇二)のほか周煌の「琉球国志略」(一七五九)にも説き及んでいる。⁽²⁾

思うに、近時琉球国の歴史に特別な思いをよせる、例えば原田禹雄^{のふお}医博の手によって冊封琉球使録の数々が現代語訳、注釈の形で発表される時代を迎え、ひと頃とはまさに隔世の感がある。この「和

漢琉球学」の分野でも飛躍的な進展を見せつつある今を生きる私たちにはこれほどの幸せもない。ただ私どもは、すでにこの分野においても先人欧人学者による業績の存在することを忘れるべきでなく、またそのことを我々に伝えてくれるのがカー原著であることを銘記したい。

先島の伝承・説話

薩州の琉球侵攻以前の琉球国の諸相を語るカーが特に取り上げるのが第三章四項の「沖縄と先島諸島」宮古、八重山、奄美大島」である。そこにみる説話の数々、その豊富な情報、内容に接する私は、カー原著の字句を追いつながら、一々驚きを隠せないでいた。この分野に疎い私は、かの慶世村恒任著「宮古史伝」に接した時の驚き、いやそれ以上の感動を覚えずにはいられなかった。一九五二年五月に沖縄民政府の先島施政官チームより提供された原稿綴りがカー原著の記述の基になったという。

蔡温の「林政八書」

そのようなカー独特の研究手法、ユニークな手法はまた、かつての宰相具志頭親方蔡温の林業政策

を語るカーの言辭にもみられる。ここでも蔡温翁の「林政八書」が一九五二年代に琉球列島民政府森林管理課によって翻訳刊行され、海外にまで配布され、「森林保護の歴史上絶賛に値する」と言われる英文資料をカーは縦横に駆使し自著に採り入れている（第五章、四）。因みにこの「林政八書」とは蔡温の森林育成及び保護策を網羅するもので、一七三七年より一七五一年までに発令された一連の政令文書集成である。「置県後発行されたもので、林政上極めて重要なものである」といわれる（中山盛茂編「琉球史辞典」）。

厳しいベッテルハイム観

本書を精読する読者は、著者カーの異常に厳しいベッテルハイム観に衝撃を受けることだろう。本稿の筆者、私自身、ベッテルハイム研究で知られる照屋善彦教授の論文 *Bernard J. Bettelheim and Okinawa: A Study of the First Protestant Missionary to the Island Kingdom, 1846 - 1854*（一九六九）に早くから接し、その論文の和文完訳プロジェクトに携わった経験を有することでもあり、著者照屋教授の穩健、前向きなベッテルハイム観との対比に少なからず混迷の感を深くせざるを得なかった記憶を有する。⁸⁾

ただ、我々はカーが自己のベッテルハイム観を書き留めるに際し、でき得る限り公平な立場を堅持

しようと努めている点を忘れるべきではない。カーの声に耳を傾けてみよう。「：沖縄でのベッテルハイムの活動に関するエピソードの数々の真相に迫り、少なくとも整合性のある公平な評価に至ることとする原資料には四種が存する。その第一は、膨大な量に上る彼自身の日誌、書簡群である。第二に、彼のミッシェン本部宛報告（そしてそれをクリフォードが要約したもの）、第三に、沖縄で直接ベッテルハイムに会い、その行動を観察した人たちによる日誌、書簡、公文書、そして最後に地元沖縄当局がベッテルハイム問題という難題と取り組んだ経緯を記す記録や書簡がそれである」（第六章、九）。カーがこれら四群の史料に配慮し、「公平な評価」を目指しつつベッテルハイム観を展開していることは言うまでもない。カーのそのような試みがどの程度の成功を収めているのか、少なくともそのような判定をなし得るのは、これまでのところカーの投げかける膨大な史料群の検討という至難な作業をなし得る数少ない専門家に限られていた。

二一世紀に生きる我々の眼前には、しかし、今や新たな時代が展開されつつある。まず第一にアンソニー・ジェンキンズ教授の血のにじむような努力の結晶ともすべき *Journal and official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim, 1845 - 54, Part I*（一八四五 - 五二）、二〇〇五、*Part II*（一八五二 - 五四）、二〇一二、が世に知られるようになったことである。二〇一三年現在、沖縄県教育庁文化財課史料編集班によって、その英文原典二巻本の和訳プロジェクトが進行中である。和訳版完成の暁には、一般読者にも、より直接的な形で己れのベッテルハイム観の形成に近づけ

る手がかりが与えられることとなろう。ちなみに、カーの言う資料群第四項の「地元琉球側の資料」については、例えば「沖縄県史料／ベッテルハイム関係記録」前近代四（一九八五）などがすでに存する。

とはいえ、今こうしてカー原著の一語一句を追う私は、もう何十年前も前、生前のカー教授の私宛私信にて「彼は悪漢だった」と衝撃的な言葉を投げかけられた記憶を未だに払拭しきれずにいることを告白せざるを得ない。その記憶は、後年、あるいは照屋教授の「ベッテルハイム論」に接し、またカー自身も注目している例えばEdith Bratt師の一連のベッテルハイム伝によって、ベッテルハイム師の聖書琉球語訳への取り組み、西洋医学の導入といった貴重な貢献のあることを知るようになった今日といえども、私の脳裏に一抹の影を落としている。そのような私のベッテルハイム師に寄せる私情が、果たして「偏見」に過ぎないものなのかどうか、その判断は読者諸氏にゆだねることとしよう。

琉球国帰属問題

琉球王国の命運をめぐる帰属問題は、琉球近代史中の中核ともすべき論題である。カーはこの問題に迫るに、ここでも中国、日本、そして琉球国近代史に関わる欧文、和文文献を援用するとの手堅い手法を以てしている。四〇歳代にして初めて琉球・沖縄史研究の分野に手を染めることとなる以前、カーはすでに中国史の研究分野に分け入って久しかった。一九三〇年代から四〇年代にかけて、その

カーは早稲田、台北帝大、そしてコロンビア大学において中国、日本研究分野での経験を積んでいた。カー琉球史学の背景、評価にはこのような点への理解が欠かせない。カー原著の末尾を占める八、九、十、十一章、実に本文の三割以上に相当するその全四章をこの問題の史的背景、実相に迫る論議に当てている。Hyman Kublin による “The Attitude of China during the Liu-chiu Controversy, 1871-1881,” *Pacific Historical Review* (1949), Frank Brinkley による “The Story of the Riukiu (Loo-choo) Complication,” *Chrysanthemum and Phoenix* (1883) などの英文基本文献のほか、この一大問題に対するカーの理解に欠かせなかったのが太田朝敷の「沖縄県政五十年」だった。⁹⁾

崎原貢教授のカー原著改訂

二〇〇〇年に出たカー原著改訂増補版の本文そのものに関する限り、図版の削除以外はページ数をも含め一九五八年出版の初版と全く同じである。ただ、新たな装丁をもって刊行されたこの改訂版、いや新装版には巻末に歴史家崎原貢教授による三ページにわたる「あとがき」が付されている。その冒頭に監修者崎原は原著者カーにつき次のように述べている。「カーは、常に弱者や虐げられた者の味方だった。ただ、悪を正さんとの意気に溢れるあまり、時として公平さを欠いたところのあったことは否めない」。そのような崎原のコメントは、今しがた検討したカーのベッテルハイム観、ある

いは、またカーの薩州琉球侵攻論（少なくとも崎原の目には）にもあてはまるところがあろう。

その「あとがき」はPart A「前近代の沖繩」、Part B「一九四五年以降の沖繩」、Part C「第四章の改訂」、Part D「原著の正誤表」の四項からなる。崎原教授の英文、その内容の理解には、カーのそれに比し、より難渋を極めたのであるが、私の理解できる範囲内で、教授の論点を要約してみよう。

まずPart Aにおいては「武器排除について」と題し、以下の論議がなされる。第三章三の「尚真の治政―中山の最盛期」の特に尚真王の功業に触れるところで、カーが「尚真の治世三〇年目に、その功績を記念すべく王府の構内に碑が建てられた」としている典拠を「百浦添欄干の銘」なりと訂正、いや新たな情報として提示している。全十一項目からなるその銘文の第四項をカーが「武器の私有が禁じられた」としている点を、伊波普猷のかつての論考「古琉球の武備を考察して、空手の発展に及ぶ」（『伊波普猷選集』上巻）に求め、さらに、伊波が「琉球古今記」で、薩摩の琉球入り以降、武備の減少に反比例し、空手道が発達した」としていることなどに影響されたものであろうとしている。伊波（そしてカー）による上記銘文第四項の解釈が重大な誤りであること、それは仲原善忠が「琉球王国の性格と武器」（『仲原善忠選集』Ⅰ）と題する論考で指摘していることで、銘文の正しい解釈は「：専ら刀剣弓矢を積み、もって護国の利器となす。此邦の財用、武器他国の及ばざる所なり」（文語体は中山盛茂編「琉球史辞典」より）とすべきである、としている。さらにカーが「王府はまず按司（崎原は「petty lords」と訳している）が個人的に武器を所有する事を禁じた。次にその

ような武器はすべて王府に差し出し、王府直轄の役人の監督下に貯蔵所に納めることにした」との陳述が何らの典拠もなしになされており、この武器を持たず、平和を愛する王国の民の物語をいかにも信憑性のあるものの如く強調せんものとカーが持ち出すのが、かのナポレオンを驚かせたという武器なき民の物語である、と崎原はいう。非武装琉球の実相が、必ずしも真に非ずと論議しているかのような崎原は、すぐその後で「琉球の支配層は血のつながりによってその地位が保たれているのであって、同時代の日本国の武士階級のように武力をその背景としているのではない」と述べたりしている。

「鵜飼の鵜」論対「共生共存」論

カーは薩州島津の琉球入りの意義を要約するに伊波の「鵜飼の鵜」論議を引き次のように述べている。「我が沖縄人は長良川の鵜飼に供される鵜の如きもの、魚を捕獲することを許されても、飲み込む事は許されない、といみじくもこのようにいったのは沖縄の学究伊波普猷である」(第四章、七)。このような悲壮的、否定的な見方に反し、崎原は一六〇九年以降、一八七九年に至るまでの薩摩と琉球との関係を規定するに、そのような一方的な論議は必ずしも真ならず、として「Overall, the Ryukyu-Satsuma relationship during the Tokugawa period can be roughly described as

symbiotic”（下線、山口）と裁断している。「共生共存」論とでもすることができようか。言葉は悪いが、崎原の見方は「お互いさま、相互扶助の関係だった」としている、としてもそれほど大きな外れではないと思う。崎原がカー原著再版の巻末で僅か三ページ半の論議を展開していることの正否、その判断はむしろ専門家の裁定に待つべき領域のように思う。ここでは、ただ、崎原の結論の一部を以下に掲げ、そのような専門家や一般読者の考察に資したいと思う。

“Ryukyu probably gained much more than it appeared to on the surface. Because Satsuma ruled indirectly through the indigenous government, the Ryukyu government system was stabilized and even strengthened, because it was in the interest of Satsuma. On the eve of the war of 1609, Ryukyu Sho dynasty was in decline, yet it continued until 1879, thanks largely to Satsuma's support of the status quo. It even enjoyed a modest prosperity. Two outstanding statesmen, Sho Jo-ken and Sai On, clearly attested to this fact” (Part A. 末尾).

崎原改訂部 Part C はカー原著の第四章、琉球王国独立の喪失前後（一五七三―一六〇九）に注目する。冒頭にてこの部分の改訂作業に関し崎原は次のように述べる。「カー原著以降の研究成果に照らし、新たな情報を提供し、その上、原著にみる陳述をより明確にし、訂正し、あるいはそれに追加

することを目的とする」。全十一章からなるカー原著の特に第四章を取り上げているのは、この部分が薩州の琉球侵攻と、それ以前、以後の琉球王国の命運という琉球史上の一代椿事を扱う箇所である事、そして崎原教授の最も得意とする専門分野であるからに違いない。以下は崎原によるその訂正、改訂、追加事項の要約である。

一、甘藷の導入は一六〇六年ではなく、一六〇五年というのが最近の知見。

二、一六〇〇年の関ヶ原の戦い以降、外様大名のうち、反徳川勢に与した者は、直ちにお家つぶしの憂き目をみた。徳川に与した大名といえども、家康にとり危険な存在と見られた者は、その後数十年の間に色々の理由で取り潰しに合っている。

三、一六〇〇年より一六〇九年に至るまでの外様大名としての薩摩藩の存在、その勢力には依然として侮りがたいものがあった。藩主の座を放棄し、剃髪して仏道に入った島津義弘だったが、終世徳川へ礼を尽くす江戸巡礼の儀を拒否し続け、果たさなかった。全面的に徳川に屈し、礼を尽くすべく江戸に赴いたのはその嗣子家久の代になってからだった。十六代守護職島津義久の琉球国王尚寧宛国書（「琉球薩摩往復文書案」（一六二〇年頃の編になる））を引き、崎原は次のコメントを付す。「琉球国を侵略したのは薩摩の兵だったが、彼らをそのような行動に走らせたのは將軍の圧力によるものだった」。

四、薩摩琉球制覇軍の総指揮官樺山の腹心本田親政の手に王国の行政がゆだねられて以後の琉球国検地の結果としてカーの記す石高の詳細、データを訂正。

五、將軍の地位を授けられるのは古来源氏と平氏の血筋を受け継ぐ者のみである。その両家のうち最も輝かしい伝統を誇るのが源氏であり、徳川と島津家がまず源氏とのつながりがあると言われる。鎌倉將軍家の基礎を築いた源氏の血を受け継ぐのが琉球の尚家であってみれば、国王尚寧を粗末に扱うこと、それは、すなわち徳川、島津両家の品位を落とすことに他ならない。琉球国の国王の存在、それが島津家にとって、かけがえない名誉な事であったことを島津は十分に認識していた。

六、琉球国王そして重臣による「永劫の誓い」は、琉球国を日本国徳川支配の現状、レベルに適合せしめる企てに他ならなかった。その意図することが仮にも薩摩の独占支配という面から解されるとすれば、そのことには何ら新奇な点はない。外国貿易が富の蓄積につながり、したがってそれが武力の増長と戦への淵源であってみれば、徳川の裁可を得ぬ外国貿易を規制しようとの挙にでるのは当然のことだった。

七、薩摩に拘留された形だった王府の重臣の一人、国頭按司が、釈放後も薩摩に居残り薩摩の指揮官としての地位を与えられていた事実ほど薩州、琉球関係が「共生共存」であった事実を象徴するものもない。

八、尚寧以後の王国を「独立のフィクション、幻想上の独立」とする見解に対しては、最近の学界から以下のような異なった解釈が提唱されている。「半自治体、半独立体制」、それは、いずれの大名の領地においても等しく享受されていたことである。史上に名高い琉球国の東南アジアとの通商貿易は、一六〇九年以前、二世紀をさかのぼる頃には、すでに絶えて久しかった。琉球国の存続を可能にしていたのは、中国と日本国との中継貿易地としての存在だった。島津の傘下にあつて、徳川とのつながりを維持すること、それは琉球にとっては、まさに死活問題だった。

Part D はカー原著にみる綴りの誤り、最近の研究成果よりみた陳述、事実、データの誤りなどの訂正箇所を示し、「正誤表」の役割を果たしている。ただ、原著の訳業を進める本稿筆者の立場が、カー原著の内容、陳述、そのものを忠実に反映、再現させねばならぬことであるゆえ、その事を果たした上で崎原教授の訂正文をカー原文と比較できる形にして提示するように努めた。とはいえ崎原教授の訂正箇所の大部分が綴りなどの訂正で、教授が訂正の要ありとして提示している改訂文の総量は数ページ分にも満たない。これは逆に、カー原著の陳述、データが元々いかに厳密になされていたのかを反映する結果ともなっている。

課題と結語

すでに触れたように、早くから沖縄県公文書館参与として鋭意カー文書の整理、目録作成に携わってきたジェンキンス教授の労作 *The George H. Kerr Papers: Issues in Cataloguing* と題する英文論考、そして沖縄公文書館版 *A CATALOGUE OF THE G. H. KERR PAPERS* が容易に参照できるようになった今、引き続きカーの代表作「沖縄^{しまちゅ}・島人の歴史」(とりあえず、そのような和訳題を考えている)の完訳版の実現、そして今継続中の「ベッテルハイム滞琉日誌」の一大和訳事業の完成をもって、今後のカー研究、その再評価の基礎史料がほぼ整うこととなる。

「沖縄^{しまちゅ}・島人の歴史」の著者カーは、英文原著冒頭の「はしがき」沖縄、米国、現今の歴史」で次のように述べている。「一八一六年、再び西洋列強が南から日本国に迫りつつある頃、かのナポレオンは英海軍士官キャプテン・バジル・ホールと沖縄の歴史について語り合っている。そして、ナポレオンは、そのような平和志向の国が永続し、生き残るはずがない、との意を開陳している。後年、そのホールの裔孫が『琉球の人々の最も顕著な民族的特性、それは身体的なものではなく、道徳面でのそれである。善良な気だてと上品な物腰、控え目で従順なその気質、客に手厚く親切であること、そして暴力や犯罪に対しては、それを潔としないことである』と書き残している」。そのキャプテン・ホールの「裔孫」が明治初期から中期にかけて琉球・琉球語研究に献身した東京帝大博言学科教

授バジル・ホール・チェンバレンであることは言うまでもない。キャプテン・ホールの頃より二世代を経て、その血縁者が琉球・沖縄に暖かい眼差しを注ぎ、またその後二世代を経る第二次大戦終結後にかけ、米国カリフォルニア大学バークレー校歴史学科、スタンフォード大学フーバー研究所所属の学究ジョージ・カーが沖縄史と取り組んでいる。ここでどうしても述べておかねばならぬこと、それはその頃のジョージ・カーの背景には、かつての「ナポレオンの軍事至上主義志向」の米国軍人の影が重くのしかかっていたことである。そのような人物の多くが例えばエール大学のジョージ・マードック教授やスタンフォード大学のジェイムス・ワトキンス四世教授ら戦中戦後の沖縄施政方針の確立に直接携わった人たちだった。ただ、そのマードックやワトキンスらが、一九四五年前後には軍服に身を包んでいたとはいえ、彼らは、軍人である前にまず何よりも片や人類学、片や政治学といった、それぞれの分野における一流の学究だったことである。そのような人物の影響、保護、理解、指導、アドバイスのもとに壮年期の学究カーが沖縄研究に専心していたこと、これは沖縄の人たち、「島人」^{しまんちゅ}にとって、とてつもなく幸いなことだったとせねばならない。今日、日米を問わず、軍備志向の人たち、なかでも米国の外交、領事館関係業務に携わる有識者の間にさえ時として見受けられ、本人の品位をさえ疑わせかねない言動に接する時勢にあつてなお、そのような影がカーの著書にはひとかけらも見られないこと、いや、むしろ島人の誇りともなろう、史実の多くが語られていること、それは、記述作業を続ける私には、最も大きな「快い驚き」の一つだった。その秘密がまた何よりも

「軍服に身を包む多くの青い目の学究」以外にも、例えば与那国善三、島袋全発、東恩納寛惇、仲原善忠、吉田嗣延、源武雄、比嘉春潮、川平朝伸：ら多くの在京、沖縄地元知識人らの影が、カーの背景にあったこと、そのことを読者に伝え得るのを幸いと思う。

【注】

(1) A. P. Jenkins: "The George H. Kerr Papers: Issues in Cataloguing," 「沖縄県公文書館研究紀要」第三号、二〇〇一年三月、一〇七頁、外国語翻訳嘱託員嶺井優香の訳文による。

(2) 筆者の提唱する「欧文日本学・琉球学」の理論的背景及びその実践例については、「琉球弧からの飛翔」(二〇〇一)、「大琉球国と海外諸国」(二〇〇八)、「英人日本学者チェンバレンの研究」『欧文日本学』より観た再評価」(二〇一〇)などを参照。従来の漢学への展望はともかく、伝統的な「洋学」はもとより、特に欧人による日本語・琉球語圏の自然科学、地誌、その比較研究(例えば久しく看過されたままの「ペリー日本遠征記」第二巻所収の科学関係論考など)をも視野に収める点、いわゆる「国際日本学」よりはやや広い展望を有し、また趣旨を異にする面の存する点に注意したい。とはいえ、互いに補う点が存し、ここでは「国際日本学」と「欧文日本学」とを並列同時に扱うこととする。

(3) 本文中にて挙げた二書のほか、筆者の過去、ほぼ半世紀に及ぶ琉球研究の基ともなっているのが、すなわち、このカー原著巻末の欧文書誌である。早い頃の拙著、編訳書、「王堂チェンバレン」その琉球研究の記

録」(一九七六)、「異国と琉球」(一九八一、一九九九)、「琉球―異邦典籍と史料」(一九七七)はじめ、チェンバレン琉球・琉球語研究の総括書「チェンバレン日琉語比較文典」(一九七五)、「琉球語の文法と辞典」(二〇〇五)、欧文琉球学の総括・啓蒙書「外国人来琉記」(二〇〇〇)、「琉球王国の崩壊」(二〇〇二)、等、すべてがカー原著の書誌に負う。これも本文にて触れたカー書誌に基づく欧文琉球学の一大成果、Beillevaire 編 *Ryukyū Studies: Western Encounter*, Part I, II, 全十巻本シリーズによって欧文琉球学は全く新たな転機、局面を迎えることとなった。今後の琉球研究学徒にとり、Beillevaire の労作はかけがえない指針となろう。

(4) 原著 Acknowledgments, xiv. その頃、旧首里王城跡に設立された琉球大学英文科在籍中の私は、キャンパスのいたる所に置かれていたその無料配布の「赤表紙本」、そして中山盛茂教授の講座「琉球史」で、この分野への洗礼を受け、開眼された。その頃、琉球史辞典の編纂に取り組んでおられた中山教授がその何百枚ものカードを手元に熟弁を振るわれる名講義に魅せられた記憶は今なお脳裏に新しい。その後たまたまスタンフォード大学のアジア語学科に教職の場を得た私が、すぐさまその赤表紙本に「海邦養秀」と題する序言を寄せる同大政治学教授ジェイムス・ワトキンズ四世の教官室を訪れたのも、思えばその赤表紙本の存在が契機となっていた。同大学キャンパスではまた、当時壮年の意気に溢れるジョージ・カー氏の聲に触れ得、その後、琉球関係欧文資料につき書信でうるさく問いただす私に快く答えて下さったカー氏の学恩をここに記すことのできるのを心から嬉しく思う。その二度目の渡米でスタンフォード大のキャン

パスに到着するや、二日目に足を運んだのが同大中央図書館、その目的は夢にまでみていたバジル・ホルのロンドン版原著「大琉球島及び朝鮮航海探検記」との対面を果たすことだった。かつての須藤利一、そしてまた近年は春名徹によるバジル・ホール琉球記研究と訳業などによって、今やキャプテン・ホルの名は南島琉球圏の人々にあまねく知られるようになった。また三年後、二〇一六年に迫るキャプテン・ホール来琉二〇〇周年記念事業期成会の発足が注目される。期成会の一員によって、今を去る二〇〇年近く前にロンドンで発刊されたその有名な「大琉球及び朝鮮航海探検記」の版元、ジョン・マレー社が、二〇世紀後半、マレー四世の代に買収されたものの、今日なおHockler Headline社の一部門として健在であるとの情報が寄せられてもいる。

(5) TASJ, 2nd ser. 8, 1931, pp.94-114.

(6) 軍政府・民政府時代の「赤表紙本」の洗礼に浴している私は当初、その赤表紙本、そして後のタトル社本と対面するたびに、ある種の「偏見」を払拭することができずにいた。私自身を含め、今日なお識者の間にさえ、ある種の偏見を抱く人たちの存することを知っている私は、しかし、カー原著を一語一語、一句たどりながら訳業を終えつつある今、その「偏見」がいかにも「偏見」に過ぎなかったことに気づき、いささか複雑な思い、というか「安堵」に近い心情を味わっている。それが私の新たな、違った意味での「偏見」なのかどうか、そのことを正しく判定し得るのが、また本書を精読吟味する読者であることを確信できること、それは私にはことのほか嬉しいことである。

- (7) ウィリアムズの生誕二〇〇年周年を記念する国際学会 *An International Symposium in Memory of S. W. Williams - Relations between East Asia and the United States in the 19th Century* が二〇一二年一月一四日から一八日にかけて北京外国語大学で開催された。筆者の発表論文 *Williams and Lewchew* については「19世紀的東西と美国」記念衛三長誕生二〇〇周年」二〇一二年二月、一四一―一四五頁、参照。
- (8) 和訳版については照屋善彦著、山口栄鉄・新川右好訳「英宣教医ベッテルハイムと琉球伝道の九年間」(二〇〇四)を参照。
- (9) Frank (Francis) Brinkley による長文の琉球国帰属問題論議については筆者の「琉球王国の崩壊と大動乱期の日中外交戦」(二〇〇二)、IV、琉球国併合・琉球諸島分割問題決裂への道程、総括 琉球事件物語、一五三―二三八ページを参照。